

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組 1】(A 中学校)

パーテーションを使って校内別室を「学習スペース」と「リラックススペース」に区切り、整備した。学習スペースでは、生徒がいつでも学習に取り組めるように各教科の学習プリントを分野別に用意し、学習環境の充実を図った。リラックススペースでは、ソファや畳を置いて、休み時間にリラックスしてコミュニケーションがとれるようにした。また、本や折り紙なども用意し、生徒は読書をしたり、絵を書いたり、季節の装飾を折り紙で作成したりした。作成した絵や季節の装飾は、校内別室や廊下に掲示した。



【取組 2】(A 中学校)

地域の方々と協力し、生徒会や委員会が中心となって、全校生徒を対象とする校内カフェを実施した。生徒同士や教員、地域の方々とコミュニケーションを取りながら、温かい雰囲気では話げできた。希望する生徒が生徒自身の好きなことや得意なことを披露する時間もあり、皆が互いを認め合い、楽しい雰囲気でも過ごすことができた。

また、地域の関連団体を紹介したり、SSWと相談するブースを作ったりして、悩みを一人で抱え込まないように、気軽に相談できるような雰囲気を作った。地域の方々と交流することで、つながりが生まれ、温かみのある人間関係が育まれた。

【取組 3】(A 中学校)

授業において、情報を正しく整理して、相手に伝える取組を行った。個人で好きなテーマを選び、一人1台端末で調べ、スライドにまとめて、発表した。

生徒が、生徒自身の好きなことをテーマに選ぶことで、自己決定の場があり、温かい雰囲気でも、クラスメイトの意見を聞いたり、質問したりすることができた。

【取組 4】(A 中学校)

校内研修を定期的で開催し、不登校の現状や支援の在り方について学び、教職員が不登校への理解を深めることができた。

また、SCを講師とした研修会を開催し、不登校生徒の傾向と対応について学んだ。不登校前に現れる変化や心のエネルギーと段階に応じた支援、教室復帰時の配慮等について、教職員で確認し、支援の充実を図っている。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（B中学校）

不登校生徒の支援の状況や現在の様子を各学年でまとめ、週に1回、支援会議を開いて情報を共有している。今後の具体的な支援について、校長、副校長、生活指導主任、養護教諭、各学年の教員、特別支援教室教員、SC、不登校対応巡回教員が出席し検討している。

アウトリーチによる支援（C中学校）

不登校生徒に対して、学校や学年で支援の方策を検討し、定期的に家庭訪問をしている。また、学級担任が家まで迎えに行き、放課後に共に登校するなど、生徒の実態に応じて支援を実施している。その際、生徒の不安などを聞き取り、支援会議で共有することで、今後の支援を検討している。

校内別室における支援（C中学校）

校内別室では、支援員が生徒とコミュニケーションを積極的に取り、最近の様子や困っていることなどを聞いて、安心して登校できるように支援を行っている。

校内別室においては、生徒の学習への興味が喚起され、自信が取り戻すことができるよう支援した結果、授業に参加できる生徒もいる。

また、授業に参加する際、不安がある生徒は支援員が教室まで付き添って、学習の遅れをサポートするなどの支援を実施している。



デジタル機器を活用した支援（C中学校）

不登校生徒の実態に応じて、自宅で授業が視聴できるように、オンライン授業を行ったり、一人1台端末から学習課題を提出したりして、学習の機会を確保している。また、バーチャル・ラーニング・プラットフォームを使用して、学習をしたり、SSWとコミュニケーションをとったりするなどの支援を実施している。

関係機関との連携（B中学校）

関係機関と連携し、不登校生徒への取組やその課題等について共有、対策、検討を行い、不登校生徒を支援している。

また、定期的にSSWが校内の支援会議に参加し、学校全体で情報を共有するとともに、今後の支援について方向性を検討している。

成果

不登校について、担任、学校、SC、不登校対応巡回教員、関係機関など様々な立場から対応を検討し、連携することで生徒の状況に応じた支援の充実を図ることができた。

課題

生徒一人一人の不登校の要因を把握し、学校として組織的な対応を検討することで、より充実した支援につなげる必要がある。